HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	あとがき
Citation	高等継続教育研究, 1, 197-200
Issue Date	2002-03-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/51869
Type	bulletin (other)
File Information	Atogaki-1.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

【あとがき】

訪問調査および報告書の作成過程をふりかえっての感想や、そこで課題と感じたことを記してあとがきとしたい。

今回、第 2 部に資料として収録した資料をまとめるにあたって、所属機関・部局等において研究・教育や管理運営、社会貢献活動などを担っておられる教員の方々、これを支援しておられる職員の方々、そして、新設の大学にあっては、大学そのものの起ち上げに関わる仕事をされてきた設置団体職員の方々から、じかにお話を聞くことができたのは貴重な経験であった。

聞き取りはすべて大学やそのサテライトキャンパス等で行われた。それぞれの大学の現地に身を置くことにより、私たちは聞き取りのイメージをより豊かにすることができた。いくつかの大学では、聞き取りと併せ、施設や広報資料を見せていただいたことをここに記し、御礼申し上げたい。教員にとってもそうだが、特に、在籍する大学以外の高等教育環境を体験的に知る機会の乏しい学生にとって、調査は、自己の学習環境を相対化する意味でも貴重な学習経験だったのではないだろうか。

大学が直面する課題を乗り越える過程において関係諸氏がそれをどのように見、どのように解決しようとしてきたかを示す資料はことのほか少ない。報告書作成に際して、私たちは、当日の話をできるだけ忠実に、細大もらさず再現することを心がけた。

だが、編集の過程では、多くの大学から、記録内容の修正・削除を要請されることとなった。口頭での表現を文章化する際に適切な修正を行ったり、個人のプライバシーに配慮したりすることはもとよりだが、問題はそれにとどまるものではなかった。編集実務を担当しながら嫌と言うほど思い知らされたのは、個人的意見とただし書きをしても、大学の「公式の見解」と異なる見解を文字にすることがことのほか難しいということであった。研究調査を目的とするものであっても、思わぬところで批判の材料とされることがないとは言えないし、調査者の大学においても、改組や統廃合などの課題を含みながらの大学改革が進行していることを考えても、改革の渦中における調査の記録にはデリケートな扱いが必要であることは理解できないわけではない。現実の動向に配慮する一方で、研究資料としての価値をどこまで、どのようにして保持するか。ことのことは、今後一貫してつきまとう課題となることだろう。

それとともに、聞き取りを実施した段階では、報告書の内容の詳細についての見通しがもてておらず、文字化することを伝えられなかったことは大きな反省点である。ご協力いただいた各位に不愉快な思いをさせたり、必要以上の手間をかけさせたりしてしまったことをお詫びしなければならない。こうした反省の上に立ち、来年度以降は、報告書の作成まで見通した訪問調査を行っていきたい。

とはいえ、道内諸大学の最近の動向、背景となった議論、歴史的経緯などについての情報の豊富さは本報告書の特長と言ってよいように思う。継続して行われる調査を単なる資料の蓄積に終わらせないためにも、研究グループの分析枠組みの確立が次なる課題である。今回、道北・道央地域の諸大学の調査に際して、私たちは、北海道の高等教育の全体像をとらえるために、その規模・分布（地域・設置者・学部学科など）や拡散の経緯の特長を、私たちなりの方法で描いてみた。その一端は本報告書に記されているが、これについても、他地域についての研究や道内地域の産業や社会分析の枠組みなどを参考にしながら、より精緻なものに仕立てていく必要がある。

1980 年代から、地域振興を第一義的な目的として、地方自治体による大学の設立や誘致が全国各地で図られてきた。その全体的な成果を判断するにはまだ時間を要すると思われるが、すでに、地元自治体が莫大な借金をつくりながら、大学は定員減や撤退という最悪のケースに立ち至っている例も複数存在する。こうした全国的動向に先駆けて、道内にはこうした方式の大学設立を行ってきた歴史がある。「成功」事例と「失敗」事例を判別するためにも、本報告書の表題にある大学と地域社会とのパートナーシップ構築という視点は有効であろう。これら述語の概念についての検

討を深めていくことも、今後の研究グループに課された宿題となる。

最後に、今年度の調査の参加者には、現役の大学職員や高等専門学校・教育行政・看護職等の経験者や教育学以外の分野を専攻した学生・大学院生が含まれていた。これら多彩な経験・経歴をもつメンバーがいたことは、訪問調査の質疑応答や、報告書をまとめていく過程でユニークな視点をもらたしたことも付記しておきたい。

北海道大学大学院教育学研究科教育計画講座（高等教育論）
助手　光本　滋

執筆者一覧

姉崎 洋一	北海道大学大学院教育学研究科 教授
光本 滋	北海道大学大学院教育学研究科 助手
久野 弓枝	北海道大学大学院教育学研究科教育学専攻 博士課程1年
上田 理子	北海道大学大学院教育学研究科教育学専攻 修士課程2年
布上 恭子	北海道大学大学院教育学研究科教育学専攻 修士課程1年
孫 磊	北海道大学大学院教育学研究科教育学専攻 修士課程1年
白取 尚弘	北海道大学大学院教育学研究科教育学専攻 修士課程1年
佐藤 革馬	北海道大学大学院教育学研究科教育学専攻 修士課程1年

高等継続教育研究 第１号

2002年3月31日発行

北海道大学大学院教育学研究科

教育計画講座高等教育研究グループ

060-0811 札幌市北区北11条西7丁目

編集者　光　本　滋

発行者　姉 崎　洋 一

印　刷　㈱ アイワード